

翔猿関 明猿会設立趣意書

翔猿関は1992年4月24日（現在30歳）、東京都江戸川区で誕生しました。上一色小学校の出身で、三歳上の兄である英乃海関の影響を受け、小学生から相撲を初めましたが、当初は、英乃海関が相撲道場で稽古する傍らで、母親である岩崎久美乃さんと共に、卓球をして楽しんでいたとの事で、初めから相撲に興味があった訳ではなかったようです。（本人は記憶がないらしい）

幼少時における将来の夢はプロ野球選手での活躍でしたが、元々スポーツ万能だった正也少年は、相撲道場に通い始め、めきめきと頭角を現す。大道中学校時代に全国中学校大会団体で優勝、埼玉栄高校時代に、全日本体重別選手権優勝、全国高知大会優勝、世界選手権2位、日本大学では全日本体重別選手権2位と、相撲の名門コースを歩み続け、好成績を残しました。

そして、念願叶って2015年1月、元大翔山関の追手風親方率いる追手風部屋に入門。幕下での経験を積み上げる中、知人を介し、東明グループ会長、福田義明（明猿会名誉会長）との運命的な出会いを果たす。その後、平成29年7月場所で、新十両に昇進するも、ケガに泣かされ、3年以上も足踏みする苦労を経験する。

しかし、最悪の状況においても、決して挫ける事はなく、逆境を乗り越え、初土俵から5年半の月日を経て、遂に辿り着いた幕内の土俵。

縦横無尽に土俵を暴れ回る関取になりたいと言う願いから、しこ名を「翔猿」と決め、その名の如く、化粧まわしには「孫悟空」の刺繍をほどこし、新たな戦いの幕を開けました。当時、身長175cm、体重131キロと、大型化が進む幕内では、小兵力士の部類。「初めての相手と対戦できるのは楽しい、チャレンジャーの精神で挑める」との気概で、新入幕戦をスタートしたが、「力士人生で一番楽しかった」と言うだけのことはあって、目覚ましい活躍により白星をあげ続け、誰しもが想像だにできなかった、優勝決定戦の道へと駒を進めた。達成すれば、106年ぶり、1914年（大正3年）夏場所での新入幕で頂点に立った「両国」以来の快挙であり、スポーツ紙の一面を、堂々と翔猿関が飾った。

千秋楽、2敗の正代と3敗の翔猿の対戦が組まれ、翔猿関が勝てば、2人もしくは3人の優勝決定戦が予想されたが、本割で正代に敗れ優勝を逃すも、初入幕で敢闘賞を受賞する華々しい成果を上げた。

その後も平幕の翔猿関が、埼玉栄高校の後輩にあたる大関貴景勝（当時：183Kg）を、はたき込みで土を付け、優勝争いを面白くさせた。この日、奇しくも、明猿会名誉会長が見守る中での、結びの一番であり、初めて片手では持ちきれない程の懸賞金を手にした。後日談であるが、翔猿からの感謝の思いとして、母である久美乃さんへ懸賞金は手渡された。良い流れから、暫くの間、勝ち越せない苦しい場所が続き、ある時、母である久美乃さんから、奮起するよう励ましを受けるも、歯向かう態度をとり、即座に名誉会長からは「八つ当たりか？ダメだぞ、親の言う事は素直に聞かないと」と窘められる。まるで父親のよ

うに。学生時代に、実の父親を亡くしている翔猿が、父親のように慕う姿は、本当に微笑ましく、初対面の人であっても、応援したくなる。

現在、持ち味の動きの良さを活かし、西前頭五枚目まで上り詰めたが、登攀の途中に過ぎない。目指すは「三役」と強い決意を胸に、日々精進する翔猿関を、発起人一同、誠心誠意、支援する事を目的に、幅広い年代層に向け、翔猿関の魅力を拡めると共に、相撲会活性化を推進する活動を中心とする、「明猿会」設立を発意した次第です。

皆様方には、設立趣旨にご賛同を頂いた上、ご入会のお申込を心よりお待ちしております。

令和4年4月24日

発起人及び役員（順不同）

福田 義 明	福田 明 里	伊 勢 文 雄	菅田多栄美
大橋 力 三	大倉 重 雄	加 藤 勝 巳	鶴岡正文
中村 博 文	平 澤 勇 久	池 田 大 輔	山田哲也

役 職

名誉会長	福田 義 明	会 長	菅田多栄美
副会長	伊 勢 文 雄	副会長	山田哲也
事務局長	十 十 才	副事務局長	児島ちはる
会計事務	橘 美 香	会計監査	栗澤優子

会計事務変更：令和5年9月1日